

証し

私は、1965年に徳島県の片田舎で未熟児として生まれ、5歳で失明しました。視力があつた頃の記憶を振り返りますと、我が家の周辺を走り回ったり、妹や近隣の子供たちとも活発に遊んでいました。人の目には、よくある当たり前の光景として映ったに違いありません。

7ヶ月で生まれたので、生後2ヶ月間保育器に入っていましたが、その間、網膜の損傷が進んでいたことは誰も気づきませんでした。それは、適量を超す酸素供給に原因があつたようですが、それも数年後に判明したことです。5歳前後までは弱視ではあつたものの、生活には不自由しないだけの視力があつたので、むしろ何の治療も施さず、現状維持のままということにしておけば、おそらく、今でも、普通に読み書きができる程度の視力は残されていたと思います。

しかし、5歳前後にある人に紹介されて眼科を受診したところ、多少の危険性を伴うが、保険適応外で効果的な療法があると知らされ、両親は迷わず担当医にその治療を受けたい旨申し出ました。幼少児にはかなりキツイ薬だつたようで、私は今でもそのときの注射の痛みだけは覚えています。さすがに、即効性があつて驚くほど視力は回復しました。しかしその喜びもつかの間、これまた保育器の酸素同様、適量を超す投与のため、網膜に過剰な負担をかけ、再生不可能な剥離を起こしてしまつたのです。医療ミスによってダブルパンチを浴びせられた網膜は、その後、現在に到るまで、物の形を映し出すことはありません。それでも、失明直後は、わずかの望みをかけて、各地の眼科を受診することに専念しました。

ある時、有力な眼科医から「すでに手遅れであり、視力の回復の見込みは0(ゼロ)に等しい」と告げられ、両親はショックを隠しきれない様子でした。だからといって、簡単に引き下がる問題でもありませんので、母親は無我夢中で神仏にすがり始めました。他の人から、どこそこの拝み屋はよく効く、という類の噂を耳にするや否や、私を連れてあちこちと訪ねたそうです。しかし何のご利益もなく、かえって不安と焦りと苛立ちが募るばかりだつたようです。親であれば、我が子を窮地から救うために、色々と手を尽くそうという気持ちはわかりますが、他にもっと良い方法はなかつたのかと少し悔やまれます。

人間は不幸のただ中にある時、どうしても人の誘いに心が迷いやすいようですが、母も近所の人々の誘いで、とうとう怪しげな宗教団体に正式に入会してしまつたのでした。最初は良いもてなしを受けましたが、徐々に裏側が見えるにつれ、それが見せかけだけであることが分かつてきたそうです。実は、その宗教団体は、巧妙な手口で多くの人を引き込んで金銭を巻き上げる、キリスト教に似せた性質(タチ)の悪い団体でした。そこへ私も通つていたので、その頃の様子は何となく記憶の片隅に残っています。残念ながら、我が一家の道しるべとなってくれるような、良き相談相手とも巡り合えず、どんどん悪い方向へと傾きつつありました。母も、その宗教がどこかおかしいことに薄々と気づいていたようですが、その思いを否定する力の方が上回っており、しっかりとのめり込んでいきました。

その頃、両親は商売のトラブルや宗教絡みのイザコザで、絶え間なく夫婦喧嘩を繰り返し、急速に家庭崩壊が進んでいました。金儲けを身上とする父親と、信心に身を任せる母とは、所詮折り合いがつかず、どうしようもない状況に陥っていきました。とうとう短気な父は、力づくで母を家から追い出し、やがて両親は離縁してしまつたのです。なぜそのような結末を迎えたのかは、当の本人でなければ、本当の理由は分からないのかもしれませんが、しかし、どのような事情があつたにせよ、間に挟まれた子供は被害者なのです。後に残されるのは悲しい思い出だけでした。

実の母が不在となり、間もなく同居するようになった、見知らぬ女性を、母の代わりとしなければならなかったのですが、私にとっては、そう簡単に受け入れられるはずがありません。さらに辛かったことは、通っている学校が自宅から離れているという理由で、寮生活をさせられ、本当に親の愛情を注がれるひまもなく、大切な少年期を過ごさなければならなかったことです。というのは、私はどうしても寮生活が嫌だったからです。身勝手な父親に対する不信感が募り始めたのもこの頃からでした。家庭内に他人が入ってきたよそよそしい雰囲気にも馴染めず、やり場のない思いをどうすることもできず、かといって継母にそんな胸の内を打ち明けることもできず、悔しい思いでいっぱいでした。

それでも学校の教師の幾人かは、このような我が家の家庭事情に心を痛み、親身になって相談にのって下さったことは慰めでした。また音楽によっても、ある程度、その満たされない心を埋め合わせてはくれたものの、一時的なものにすぎませんでした。そうは言っても、見ることで楽しみを得られない私にとって、音楽だけが心の拠り所となったことは今から考えますと、ごく自然の成り行きだったように思います。また、音楽教諭から定期的に指導を受けるようになってからは、よりその楽しさを実感できるようにもなりました。そしてだんだんと上達するにつれ、自分にも出来ることがあるという自信をもてるようになっていきました。家庭内での悲しい出来事で深く傷つけられていた私にとってそこから立ち直る意味でも、そのような自信はプラスに作用しました。

やがて、私が高校生になったとき、健全なキリスト教に接する良い機会を与えられました。熱心なクリスチャン教師が転任してこられ、運良く、私のクラス担任となりました。高校生という好奇心旺盛な年頃でもあり、また若さゆえの純真さをも相まって、そのクリスチャン教師から、興味深い多くのことを吸収していきました。特に、世の貧しい人々に仕え、キリストに生涯を捧げた多くの信仰者の話を聞かされたように思います。何よりも、それらを通して、神の子であるイエス・キリスト御自身の愛について語って下さいました。また政治や教育、福祉や医療に至るまで、まずこのイエスの愛の業が根底になれば、真の目的を見失ってしまうことにも指摘され、そこにこそ、他に見られない真の精神が流れているのではないかと、強く意識し始めたのです。

さらに、先生の教育に対する熱心さ、誠実さ、そして謙虚な祈りの姿勢と、自己犠牲を厭わない勇氣ある行動を目の当たりにして、他の教師にはない力を感じ取ったことも事実です。ともかく、普通では考えられないほど、キリスト教色を前面に打ち出して教育される方でした。後に、その事が原因で転任させられたという事実からみても、本気で、キリストの真理を生徒に伝えようとしていたことが分かります。このように、自分の立場を犠牲にしてまでも、キリストを宣べ伝えようとしていた姿勢に、私の心も動かされていったと思います。また先生からお誘いを受けて、何度か礼拝や集会にも参加し、そこで、音楽は神を讃美するためになくてはならないものであることや、歴史的にみても、キリスト教と音楽は切っても切れない関係にあることを知りました。

その経験が、信仰の第一歩を踏み出す確かなきっかけとなったのです。先生ご自身も、私に与えられている音楽の賜物を伸ばし、将来は神様を讃美するために用いられるようにとの願いを、常に持っておられたようです。私自身も、以前から音楽の専門コースへ進みたいとの思いはありましたが、情報不足の上、母校の徳島盲学校では前例もなく、一体どこからどう手をつけたいものかと思案に暮れていました。何しろ、全ての生徒が、同一の進路を選択しなければならないという特殊な状況下にあり、その中で、私のみが異なる進路を選択しようとしていたのですから、指導教諭からみれば、厄介な生徒であったに違いありません。それでも根気よく、多くの人と相談した結果、最終的に自分の意志で状況を決意したのです。そんな中で、クリスチャンの教師だけは、私の希望が叶えられるよう協力し、祈って下さいました。それだけでなく、先生の自宅で冬休みの15日間、

泊りがけで世話になって、受験の個人指導までしていただいたのです。多忙にも拘わらず、私のために無償でこのような取り計らいをして下さったことは、本当にお礼の申し上げようありません。

1984年4月、いよいよ郷里を離れ、新しい環境での学生生活がスタートしました。そこは盲学校の中では唯一の国立の機関であり、それだけに、設備やスタッフ面においても充実していました。全国各地から集まってきた仲間との共同生活によって、多くの示唆を与えられたことも確かです。だんだんと都会の雰囲気にも慣れ、ピアノを中心とした日々の学習も軌道に乗ってきました。それらの学びにおいて、理解ある教師が、私の能力に応じた指導をしてくださったので、短期間とはいえ、充実した学びができたことは幸いでした。まず一つの区切りとしてこの2年過程の専攻科音楽科を終了し、さらに大学へ進学することとなりました。

入学が決まった都内のM音楽大学は、かなり以前から点字受験を認めてはいたものの、入学後のサポートはなく、殆どが学生任せということなので、教材の準備をはじめ、その他、色々な日常の煩わしさを思うと、とても不安でした。私を取り巻く環境の変化に、果たして対応出来るのだろうかと悩んでいました。それは普通に育ってきた健常者の学生にとっては、想像し難い特殊な事情かもしれません。とりわけ、私のような全盲学生は、多くの場面で他者のサポートを必要としますので、より良い人間関係を保つために気を配らなければならず、緊張していたように思います。

そういう訳で、入学当初は私自身も戸惑いがあり、周りの人々も私にどう接したらいいのか分からず、互いのやり取りにぎこちなさが目立ちました。そして、障害者に対する無理解からくる、あらゆる誤解や、すれ違いなどにも苦しみました。また、お互いに育ってきた環境の違いから、同年代の友達と話が合わず、自分だけが取り残されているかのような寂しさを味わったこともよくありました。しかし、彼らと過ごした寮生活は楽しい思い出でもあり、以前にもまして、広い視野で物事を見つめていけるようになったという意味では、得難い貴重な経験でした。

「なぜ、神はこのような不公平をお赦しになるのだろうか」、という疑問をもち始めたのも、ちょうどその頃からでした。そのように心が沈みがちだったころ、高校時代の、あのクリスチャン教師から、数回に渡って励ましのお便りが届きました。そこには、イエス様のことを忘れてはいけないこと、讚美をすること、信仰から遠ざかってはならないことが綴られており、さらに、あなたのことをみんなで祈っていると毎回書き添えられていました。

一方、FEBCのキリスト教放送から流れてくるメッセージや讚美を、ひとり静かに聞いていると、心に慰めと安らぎが与えられ、次第に落ち着きを取り戻していきました。さらに、点字で出版されている信仰書にも触れ、それらを読み進むうちに、何度も涙を流すこともありました。また、視覚障害クリスチャンを中心とした集会や、クリスマス会に参加する機会があり、彼らの生き生きとした証しに接し、それまでのモヤモヤとしたものが薄らいでいくのを感じました。そのとき、視力の有無というような表面的なことが問題ではなく、ありのままの姿で、与えられた賜物を用いていくことだと教えられ、力づけられました。次第に私にも希望の光がもたらされ、与えられた音楽の賜物を用いていきたい、との願いを持つようになりました。

その後、神様は私のために必要なものを備えて下さり、その時々にはふさわしい出会いを御用意くださいました。中でも、沖縄出身の福音歌手との出会いは印象深いものでした。何度か彼のコンサートを聴く機会があり、音楽がこれほどまでに人の魂を揺さぶるものであったのかと驚かされました。同じ視覚障害というハンディキャップを負いながら、音楽を志す者として、大いに勇気づけられたことは確かです。特に私の場合、珍しいケースとして、ピアノ演奏のみならず声楽の賜物をも与えられ

たことは感謝であり、それにより、讚美が一層豊かなものになると思うのです。

私のこれまでの歩みにおいてマイナスとしか思えないことも、生きて働かれる主が、プラスに変えて下さるといふ素晴らしい恵みをいただいてからは、物事を前向きに捉え、「ただ神のみ業があらわれるため」に、ひたすら主を信頼して歩み続けたいと願っております。

この私の罪のために十字架上で血を流し、死に至り、三日目に甦って、今も生きて働かれる主イエスをお迎えしてからは、決して孤独ではないという思いに満たされました。その思いは、以前は経験したことのない感動的なものでした。こんな私でさえ、主に愛され、生かされているという喜びが湧き起こってきたのです。そして、神様からの最高の贈り物である音楽を用いて、救いの証しと讚美をすることの大切さを最近強く思われます。

たとえ、肉体の目が見えていても、真に見るべきものを見ていないとしたら、決して救いの恵みに与ることはできません。今現在、私の目は見えませんが、それだからこそかえって見えてくるものや、逆に、他者に与え得るものもたくさんあることに気づかされ、感謝です。また聖書にも、必ず神の永遠の御国が成就するとありますので、そこに加えられたその日には、この目で主イエスにお会いできるという、大きな希望を抱いておりますし、その信仰に支えられて、何事も乗り越えてこられたのだと思います。

この真の愛と希望がたっぷりつまったイエス・キリストの福音を、一人でも多くの方に信じていただきたいと願っております。

1993年のイースターに、連れ合いともども、バプテスマ(洗礼)の恵みに与ることができて、感謝でした。以後二人で各地を巡回伝道しておりますので、そのことも合わせて祈りに覚えていただければ幸いです。思えば、信仰の第一歩を踏み出してから、なんと10年以上も経過してから、二人揃ってバプテスマ(洗礼)を受けることができました。恐らくこのことにも深い意味があり、神の御配慮があつたことだと信じております。

※メッセージ…キリストの福音を、分かりやすくお伝えします。初めての方に、聖書や教会にもっと興味をもってもらえるような親しみやすい話や、救いの証を語ります。柔らかい語り口の中から、湧きあがる喜びと信仰を通して、聴く者の心に響くメッセージを伝えます。

※讚美…よく知られた讚美歌やゴスペルソング、独唱讚美歌などを、簡単な曲目解説も入れながら讚美します。メッセージの合間に歌うことで、より伝わりやすく、魂に響く讚美となって、悔い改めの思いを湧き起こすことでしょう。

※ピアノ独奏…メッセージや讚美歌などの合間に、クラシックの名曲などを簡単な曲目解説をしながら独奏します。コンサートの雰囲気が変わり、時には心和ませ、時には緊張感をもたらし、聴く者の心に変化をもたらします。

(注)よく行く先々で「ピアノの弾き語り」と間違われますが、上記のようにピアノはクラシックの名曲を独奏し、歌はピアノ伴奏に合わせて歌いますので、お間違えのないようお願いいたします。ですから、「ピアノのある所」でないとコンサートが出来ません。オルガンはもちろんのこと、電子ピアノ

も演奏には適しませんのでご理解ご了承くださいますようお願いいたします。

神様の恵みによって与えられた音楽の賜物で主イエス・キリストの御業を讃美し、福音に生かされている喜びを証しさせていただければと願っております。混迷した現代社会に生きる人々に対し、イエス・キリストにある愛と希望と信仰を伝えたく、熱い思いを抱いております。また、ジャンルや演奏方法にも工夫を凝らし、多くの人々の心に訴えかける讃美を目指しております。是非、この機会に教会の年間行事予定に組み込んでくださいますよう、ご検討願います。

現在までコンサート活動を続けてこられたことは、ひとえに多くの方々のご理解とご協力の賜物と、感謝しております。全国各地で、讃美を通して福音の恵みを証しさせていただいておりますが、いつも、困難な状況を切り開いてくださった神様の大きな御愛を感じながら、お話しさせていただいております。

これまでの私自身の体験をもとに、命の尊さ、生きることの喜び、苦しみと悲しみの中で培われた明るさとこだわりのなさ、といったようなものをピアノ演奏や讃美、語りかけを通して、聴衆の皆さんに訴えかけ、自然な形で福音の真髄にふれていただけるようなスタイルで、これまで行ってまいりました。

人間関係が希薄化し、心がとりとめもなく揺らいでしまう現代社会の中であって、やすらぎと潤いを与えてくれる音楽の果たす役割は、たいへん重要です。ささやかな私の信仰から奏でられる音色が、悩める魂のひだに深く刻まれ、明日への活力を生み出してくれることを願っております。そして、さらに、キリストを信じる信仰へと導かれるなら、そのことにまさる喜びはありません。音楽こそ、ノンクリスチャンと教会を結ぶ掛け橋として、神様からいただいた素晴らしいプレゼントだと確信しているからです。

そして全盲というハンディキャップを負いながらも、主を讃美し、証しさせていただいているその力の源を、一人でも多くの方にお伝えできればと願っています。